

多様化するIP電話の世界

IP電話は2002年頃から先行企業が導入を始めて脚光を浴び、多くの企業がIP電話の導入を進めていくと見られていたが、実際にはIP電話化はそれほど急速には進んでいない。それにはいくつかの理由があるが、導入の前提となる通信費が安くなるという点でみると、従来の電話回線でも企業への大口割引があり、試算するとIP電話と比べて料金はたいして変わらない。しかも、全国にまたがるネットワークを高速化して整備するとむしろランニングコストが上昇するケースも生じるということもあり、料金面でのメリットが感じられない。また、IP電話の導入に際しては、既存のPBXを取り替える必要があるが、まだ使える既存PBXを前倒しして償却し、別途初期導入の投資をしてまでIP化する必要はないと判断する企業が多い。

したがって、IP電話の導入メリットをコスト面だけではなく、業務の効率化に焦点をあてた検討を進める企業が増えている。そのため、IP電話のソリューションベンダーは、業務の基幹システムとの連携、グループウェアとの連携など、情報システムと連携したシステム化を進めている。しかし、企業規模や業種によって要求条件は異なっており、顧客に満足のいくシステムの提案はなかなか難しい。

IDCジャパンの調査によれば、国内VoIP機器の市場規模は04年末は868億円であるが、今後年間平均成長率5.1%で拡大し、09年には1,146億円に

達するとみている。

IP電話の付加価値的なシステムとして現在注目を浴びているのは、無線LANと携帯電話の両用端末を使った無線IP電話システムである。このシステムでは外出中に固定電話宛に電話がかかってきても、自動的に判断して携帯の番号につなぐことができ、社内では携帯から電話をしても無料で通話できる。しかも固定電話のような配線工事が不要なのでオフィスの引っ越しやレイアウト変更の際のコストを抑えることができる。また、ソフトを利用して、同僚の所在を知ったり、即時のメッセージ交換も可能である。こうしたことから、各ベンダーは無線LANと携帯電話のデュアル端末の販売を積極的に進めている。

ソフトウェアをパソコンにロードするだけで使用できるソフトフォンも新しいIP電話として注目を浴びている。ルクセンブルグの技術者達が開発したソフトフォンのスカイプ(Skype)は、03年8月に初めて提供を開始した直後から世界的に利用者が急増し、本年8月には登録ユーザー数は5,300万人に達している。スカイプは利用者相互であれば、無料で電話でき、最大5人までの会議通話ができる。また、スカイプアウトといって一般加入電話との通話も低料金で可能であり、わが国では未だできないがスカイプインという一般加入電話からの通話も可能である。わが国の登録ユーザー数は現在200万人程度である。

スカイプの特徴は、P2P機能を使っているということである。しかもインデックス情報はパソコン約1000台ごとに特定の1台のパソコンに持たせるという方法を採用しており、そのパソコンをスーパーノードと称している。一般的なIP電話ではSIPサーバが必要でありユーザーの増加とともにSIPサーバを追加する必要があるが、スカイプではそのSIPサーバをスーパーノードに代行させており、これによって多額の設備投資を抑えているわけである。また、高い通話品質を実現するための技術を駆使しており、通話品質は一般の加入電話に劣らないと言われている。

本年9月12日に米国のネット競売会社イーベイがスカイプを26億ドルで買収すると発表して、関係者を驚かせた。スカイプの今年の収入予想はわずか6千万ドルであり、高い買い物との声もある。しかし、米国ではIP電話分野に多くのIT企業が参入を図っている。ヤフーは本年6月にIP電話事業者DialPadを買収しており、MSNは本年8月にソフトフォン会社のteleoを買収、AOLは本年9月に同じくTotalTalkを買収している。イーベイも同じ狙いからスカイプを買収したものとされるが、果たしてこれらの買収がどのようなビジネスモデルを生み出すのか、きわめて興味深い。

以上のようにIP電話の世界は多様化の様相を見せている。今後さらに新しい技術が開発されてますます多様化が進み、既存電話事業者を含めて激しい競争が展開されることになる。